

# 思索の杜 Vol.10

2016年3月21日 発行

編集・発行 常磐大学大学院同窓会

〒310-8585 水戸市見和1-430-1  
 電話 029-232-2511 (大学代表)  
 E-mail: gradouso@tokiwa.ac.jp  
 URL: http://www.tokiwa.ac.jp/~gradouso/



## ご挨拶

常磐大学・常磐短期大学 学長

富田 信穂

常磐大学大学院同窓会の会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、私こと2015年4月1日付で常磐大学および常磐短期大学学長を命じられました。就任後ほぼ1年が経過してしまいましたが、皆様にご挨拶する機会を逸し大変失礼いたしました。この度、常磐大学大学院同窓会より同窓会報『思索の杜』第10号に寄稿する機会を与えられましたので、遅ればせながらご挨拶を申し上げます。

まずは常磐大学大学院に対して、同窓会会員の皆様からなお一層のご指導ご協力を賜りますよう伏してお願い申し上げます。また併せて常磐大学大学院の現状を報告するとともに、常磐大学大学院の在り方などについて私の基本的な考えを申し上げたいと思います。

ご報告につきましては、会員の皆様には誠に申し訳ありませんが、2016年度からコミュニティ振興学研究科修士課程、並びに被害者学研究科修士課程及び博士後期課程につき、募集停止をすることとなりました。なおこれらの研究科の在籍者がなくなった時点で正式に廃止されることとなります。これらの研究科の修了生に皆さまをはじめ多くの方々にご迷惑をおかけして心苦しく思います。我々にとっても苦渋の選択ではありましたが、大学院運営を巡る情勢が厳しいことからこのような結果となりました。ご了承のほどお願い申し上げます。存続する人間科学研究科博士後期課程及び修士課程につきましては何とでも維持したいと考えております。

次に常磐大学大学院の在り方について述べることにします。これにつきましてはこの『思索の杜』第6号(2012年3月20日発行)における当時の森征一学長(現・学校法人常磐大学理事長)の「大学院について思うこと」と題する文章で述べられているお考えを全面的に継承したいと思います。先生のお考えを要約すれば、「大学院設置基準」においては、大学院の使命は「研究者」及び「高度専門職業人」の養成とされているが、「常磐大学は建学の精神である『実学』の伝統を継承して、大学院における教育は『研究者』を『高度専門職業人』の中にも含める形での『高度専門職業人』の養成を使命とする方向で展開されてきた」のでそれを「さらに発展」させることが期待される、ということになります。

このお考えを継承することは、常磐大学大学院の在り方についての継続性を維持することになると同時に、常磐大学大学院の特徴を示すことになると考えます。この方向性について同窓会の皆様のご理解をお願いするとともに、常磐大学大学院への益々のご支援・ご協力をお願いして、ご挨拶に代えさせていただきます。



## 同窓会長挨拶

常磐大学大学院同窓会長

森山 賢一

常磐大学大学院同窓会会員の皆様におかれましては、ご健勝にてご活躍の事と拝察いたしております。

会員の皆様には、日頃より同窓会活動ならびに運営にご支援、ご協力をいただき、心より厚く御礼を申し上げます。

常磐大学大学院は、1989年に設置以来、多数の修了生を輩出し、2005年に設立された大学院同窓会も、現在会員数約180名となり、着実に組織として定着してまいりました。

会員の方々は、全国各地のみならず、海外においても活躍され、これらを繋ぐ架け橋として同窓会も機能していくことが求められます。

これまで同様に毎年1回刊行されている同窓会会報『思索の杜』をはじめ、同窓会総会時に開催されます懇親会、研修講話会など、情報交換が積極的になされるようにさまざまな活動が実施されています。さらに出版事業やホームページの充実にも取り組んで、更なる会員間の交流が行われることを期待したいと思います。

今後とも、何卒ご支援下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

常磐大学大学院のますますのご発展とともに、同窓会会員の皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

## 総会・懇親会のご案内

2015・16年度の常磐大学大学院同窓会総会・研修会および懇親お茶会を下記の日程で開催いたします。会員の皆様には、どうぞご出席賜りますよう、ご案内申し上げます。

- ◇日時：2016年6月11日(土)  
13時30分～16時30分
- ◇会場：常磐大学芝浦サテライトキャンパス  
東京都港区芝浦3-3-6  
キャンパス・イノベーションセンター 4F (403)  
(山手線田町駅より徒歩2分)
- ◇講話：認知症高齢者のケア(仮)  
滝沢真智子 会員  
(茨城キリスト教大学看護学部看護学科専任講師)
- ◇会費：1,000円(2014・15年度の新規入会者は無料)

# 教育現場から 同窓のまど

## 最近思うこと

梶 正 憲

学校の教員として、仕事を始めてから6年あつという間の月日が経ちました。私が、大学院修士課程に入学したのが、今から8年前のことです。当時私は、銀行に勤務しておりました。今とは違って、毎日毎日ノルマに追われる営業の仕事をしておりました。学部時代に、教員免許を取得し、卒業をしました。しかし、どうしても「教師」になりたいという夢が捨てられず、思い切って銀行を退職しました。

大学院在学中は、主に「総合的な学習の時間」についての研究を行いました。この「総合的な学習の時間」は、平成8年7月の第15期中央教育審議会第一次答申において「総合的な学習の時間」が提言され、小学校及び中学校では、平成14年から全面实施されたものです。しかし、今日「学力低下」及び「ゆとり教育」が大きくクローズアップされ、この「総合的な学習の時間」がトーンダウンしている面があります。本来、「総合的な学習の時間」の活動の源は、「各教科」の学習の知識・技能であり、それを活用して問題解決していく過程での探求力の育

成であります。また、「総合的な学習の時間」の中では、「各教科」の基礎・基本が確かめられて定着していくという、相互で補い合うという関係が求められています。平成20年の改訂では、「総合的な学習の時間」で育てるべき能力を明らかにしつつ、「各教科」と「生活科」との相互作用を保ち、活動を充実させていくことが留意されなければならないのであります。

現在は、公立中学校の現場にて子どもたちと毎日楽しく仕事をしております。実際に子どもと向き合うことは簡単なことではありません。「十人十色」という言葉があるように子どもたちもそれぞれ違います。いかに子どものために伝えることができるか。日々の授業計画や学級経営を考え過ごしています。特に、子どもたちに色々な体験をさせることは普通の教科では学び得ることができない部分もあると思います。ただ机上の知識で詰め込み型の学習では、子どもたちを圧迫させてしまい視野を狭くしてしまいます。様々な体験を通して、子どもたちの「興味・関心」を重視してあげることが、それが子どもたちのやる気にも繋がってくると思います。

(2010年3月人間科学研究科修士課程修了。現・茨城県城里町立常北中学校勤務)



## 憧れの小学校教員 ～まもなく3年目に入るにあたって～

寺田 叔弘

わたしは、大学院修士課程を修了後、5年間の講師経験を経て、平成26年度正規採用され、現在の小学校に勤務して2年目になります。

小学校時代に思い憧れた教師という夢が実現したことに対する大きな喜びがある反面、実際の教育現場で直面する責任と仕事量の膨大さに日々悪戦苦闘しながら、毎日を過ごしています。

特に「教師は、授業で勝負する」と言われるように、学習指導の充実はその役割として大きなウェイトを占めています。

小学校教員の担当する教科は国語や算数などの教科に始まり、体育や図工、音楽など技能教科までその幅は広く、毎日次から次へと授業を進める中で、油断をしているとどんどん時間が過ぎていきます。そのような中で、しっかりと子供達に分かる授業をするためには、どのようにしたらよいか、いくつか考えて実践していることがあります。

一つは、効果的な教材の活用です。ICT機器の力をかりて、動きを出したり、音声を出したりして子供達によりイメージしやすくさせることができます。

例えば、算数の時間でかけ算九九を練習する際、パワーポイントのスライドショー機能を使って、テンポ良く繰り返し練習することができました。スピードや量、種類などを自由に変えられるこ



とも汎用性の面で効果的でした。

もう一つは、子供達に実際に体験させたり、操作させたりすることです。特に算数や生活科などでは、文字からは見えない、分かりにくい事象も体験を通すことで、子供達自らが発見し「なるほど!」や「分かった!」につながる場面を見ることができています。まずは、教師がGOODモデルを示し、ここに向かうためにはどんなことをするのか、一つ一つ確認します。そして、次に子供達に活動をさせてみます。すると、子供の実態に差が現れてきます。そんなときに、修正の意味を含めた褒め言葉であったり、



意欲を高める言葉を掛けたりすることでその後の姿勢には大きな違いが見られます。昨年の新規採用の時、指導教官より「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ。」という有名な言葉があるぞ、と教えていただいたことを思い出し、まさにその通りだと実感しています。

ただ、これらの実践のバックボーンにおいて留意しなければならないことがあります。それは、常にねらいや目的を見失わないようにすることです。小学校の教育実習でお世話になった指導教官の言葉が耳に残っています。「活動ありきの、学び無しであってはいけない。」子供達は活動することが大好きで、生き生きと



した姿を見せます。教師は、その姿にただ手放しで満足するのではなく、活動を通してきちんと身につけるべきことが理解できたのか、をチェックすることを忘れてはならないと考えています。

教師という仕事は、答えや成果がすぐに現れないことが多いです。その時その



時の学びを大切にすると共に、指導者として最大限の手立てができるよう日々研鑽に励み、教員としての資質の向上と人間性に磨きを掛けることを続けていきたいと思っています。

(2008年3月人間科学研究科修士課程修了。現・茨城県筑西市立新治小学校勤務)

## 学校法人の職員として

橋本 直

私は、人間科学研究科修士課程修了後、学校法人の事務職員となり、17年目を迎えようとしています。学部、修士課程の学生時代、行動分析学の手法に基づき研究をすすめてきました。行動分析学とは、人間または動物などの行動を分析する学問です。具体的には、独立変数である“環境”を操作することで、従属変数としての“行動”がどの程度変化したかを記述することによって、行動の「原理」や「法則」を導き出すものです。「人の行動を分析する」という経験を買われたためか（定かではありませんが）、採用後すぐに人事部に配属となりました。以降、15年間に亘り、人事給与課という学校法人の管理部門にて、労務管理・労働保険・福利厚生・採用事務等の業務を通して、学校に関わってきました。振り返ってみれば、実験で得たデータを収集し統計的手法を用いて解析するなどの経験をはじめとする、大学院時代における様々な経験が担当業務を遂行するのに役立っていたように思います。

15年間の管理部門を経て、2015年4月より高等学校の事務室に異動となりました。これまで同期や後輩の異動を見送ることや、職員の適性を見極めて異動計画を練るといったことしか経験していない私にとって、勤続16年目にして人生初の異動は非常に劇的なものでした。業務面では、学校を根幹から支える業務から直接的に生徒を支援する業務となり、生活面

では、在籍生徒が大学生から高校生になったことで、学校行事等の年間スケジュールが大きく変わり、私のライフスタイルも変更を余儀なくされました。4月当初は、異動を超えてもはや転職と感じていたほどです。間もなく1年間を終えようとしておりますが、最近ようやく落ち着いて周囲が見えはじめてきたように感じます。

現在、中央教育審議会において、次期学習指導要領の見直しに向けた議論が進められておりますが、その中で今後の学習・指導方法の在り方として注目されているものに「アクティブ・ラーニング」があります。文部科学省の定義によると「アクティブ・ラーニング」とは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」のことで、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等ほか、教室内のグループディスカッション、ディベート、グループワーク等がこれにあたります。

このように記載をしていますが、「アクティブ・ラーニング」を単なる「グループ活動」と誤解をされてしまうかもしれませんが、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」(26文科初第852号、平成26年11月20日)では、『「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。』とされており、単にグループ活動を取り入れるのみならず、相応の指導方法の改善が求められます。



そういった意味において、本校でも「アクティブ・ラーニング」を取り入れた授業展開については非常に注目しており、全教員を対象に「アクティブ・ラーニング」に関しての研修会を開催するなど、喫緊の課題になっています。

課題という繋がりで考えますと、高大連携が挙げられます。本校は学校法人常磐大学が設置する高等学校ですので、常磐大学や常磐短期大学とは同一法人内の関係校という位置づけになります。既に、大学の先生方による高校生対象の特別授業を継続的に実施するなど、特色ある取り組みを実施しておりますが、より発展的に展開が可能であるとも感じています。学校法人常磐大学は、茨城県内には数少ない、大学から幼稚園までを擁する総合学校教育機関です。このスケールメリットを最大限に活用し、更なる教職員間の交流と相互の理解が進むことで、まだ本校にはない高大連携の新たな形が生まれるものと考えております。

この先あとどれ位の期間を、高等学校の事務室で勤務できるのか、正直、見当もつきません。加えて学校法人の事務職員が、教育の現場にどの程度関与ができるのか、正直、未知数です。ただ学生時代の経験が前部署の業務遂行に活かされたように、前部署の経験を最大限に活用し、生徒一人ひとりに満足してもらえるような学校づくりに寄与することが、本校ならびに本法人の更なる発展に繋がるものと信じ、一日一日を大切にしていきたいと思っています。

(2000年3月人間科学研究科修士課程修了。現・常磐大学高等学校勤務)



## 会員の最新紹介

日本応用心理学会 (企画) 藤田主一・浮谷秀一 (編)

『クローズアップ学校 (現代社会と応用心理学 第1巻)』(福村出版, 2015年)  
田中道弘 (トピック8「情報教育」pp.78-87)



最近の学校や子ども達に関するニュースは、非行やいじめなどの問題行動が目立つ。いま、学校現場では子ども達と小学校から大学の学校教育を取り巻く環境に何が起きているのだろうか。本書は心理学に関わる研究者が、現在の教育現場で巻き起こる問題に触れて解説している。その内容は、「現代の子ども達の発達、教育と学力、危機管理、情報教育、不適応問題、学校と社会や文化との関係」など26のトピックで構成されている。

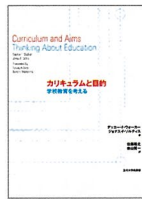
田中道弘会員は、「情報教育」を執筆している。先進国では最下位レベルとされる日本の情報教育の問題を指摘した上で、「流出する個人情報」「侵害される知的財産権」「守られないネチケット」「不完全なセキュリティ対策」などの問題とともに、中・高校生だけでなく、大学生までもが陥りやすい「ネット依存」の問題を取り上げており、インターネット社会における情報リテラシー教育について提言している。

本書は、コラムを交えながら分かりやすく解説されているので、初学者にも理解しやすい。また、トピック毎に完結しているためどこから読み始めてもよく、かつ分かりやすい。学校関係者や臨床心理学を学ぶ大学生や大学

院生などだけではなく、子どもに関わる全ての人にお薦めしたい1冊である。

(会員・磯山あけみ)

デッカー・F・ウォーカー、ジョナス・F・ソルティス著、佐藤隆之、森山賢一訳  
『カリキュラムと目的 学校教育を考える』(玉川大学出版部, 2015年)



現在、全国の大学や専門教育の教育現場で多くの会員が活躍している。本書は、学校教育の目的とカリキュラムをめぐる諸問題について、実際に「考え」させる教科書として全国の教員養成系大学ですでに高い評価を得ている。「根本的で現代的」であることが最大の特徴である本書は、アメリカに限らず、日本の学校教育にも多くの示唆を与える。なぜなら、根本的であることは「実践的」でもあるからだ。

本書の構成は、教員がカリキュラムについて考える必要性や重要性をまず考えさせ、次に教育の目的を考えさせた後、カリキュラムとは何か、いかにカリキュラムを作るか、カリキュラムがいかに実践で機能しているか、最後に、カリキュラムをいかに改革するか、ひとつひとつ段階を追って考えさせている。さらに各章の最後には、さらなる探求のための参考書一覧がひとつひとつ簡潔な紹介とともに掲げられている。一貫性ある、かつ終わりのない日々の教育活動を実践する教師や、教師を目指す学生のいわば「支柱」となる書物となろう。翻訳が長く待たれていたが、こなれ

た訳によって理解が容易により深まろう。教育現場で働く人々や教育実践に関心ある人々に広くお薦めしたい。(橋本 直)

山岡道男編

『太平洋問題調査会 (IPR) とその群像』(早稲田大学アジア太平洋研究センター、リサーチシリーズ第6号, 2016年)  
飯森明子 (第3章pp.51-72)

第一次世界大戦は各国に様々な影響を与え、多様な思想と活動が重層的に展開し、戦勝国の一つである日本も、民間個人や団体が活発に様々な国際交流活動を進めた。とりわけ太平洋問題調査会 (IPR; The Institute of Pacific Relations [1925~1961]) は、いわゆる「国際主義者」が集まる非政府国際組織 (INGO) の嚆矢として評価されている。本書は日本、および環太平洋諸地域の代表者のうち、10名の知識人たちの国際認識をめぐる思想と活動を論じた研究評伝の集成である。飯森明子会員は、戦前から戦後に活躍した財政家・企業経営家であると同時に民俗学者・文化人類学者でもある渋沢敬三を取り上げた。戦後日本 IPR 理事長を務め1954年第12回 IPR 京都會議を主導開催した渋沢を全人的存在として考察し、その国際認識と内外人脈の学際的分析と考察から新しい渋沢敬三像が提示されている。異なる立場と様々な思想の討論の場でもあった IPR で活躍した彼らの国際交流活動は、国際社会が大きく変動する現代に生きる我々に多くの示唆を与えてくれる。

## 母校の現況

### 在籍者数と活動



2015年10月1日現在の大学院在籍者数は、人間科学研究科博士課程 (後期) 3名、人間科学研究科修士課程 19名、被害者学研究科博士課程 (後期) 3名、被害者学研究科修士課程 4名、コミュニティ振興学研究科 4名、合計 33名です。

また、2015年度は、臨床心理士資格試験に人間科学研究科修士課程第Ⅲ領域 (臨床心理学) 修了生 4名が合格しました。(会員・大友由梨香 現・常磐大学学事センター大学院担当)

### ◆大学院同窓会ホームページが新しくなりました

長らく諸事情からホームページ更新の難しい状態が続いておりましたが、昨年新しい管理体制を作りホームページを更新しました。今後は、様々な情報の発信や交換の場として随時更新してまいります。どうぞ利用ください。

URL : <http://www.tokiwa.ac.jp/~gradousou/>

### ◇◇事務局からお願い◇◇◇◇

当会からの郵便物が返送されるケースが増えています。転居・所属変更の際には、当会にもご連絡ください。また、会員が著書を刊行された際には、ご一報ください。新刊紹介などでご紹介いたします。

E-mail : [gradousou@tokiwa.ac.jp](mailto:gradousou@tokiwa.ac.jp)

### ◆本年度の大学院同窓会賞について

大学院同窓会賞は、学際的研究・教育を特徴とする常磐大学大学院で学び、当該年度1年間において優秀な研究論文を執筆して、全研究科の教員によって選定推薦された修了生1名を表彰し、将来の活躍を同窓会として支援しようとするものです。2015年度修士課程修了生に対する大学院同窓会賞に推薦された修了生はいらっしゃいませんでした。今後の在学の皆様のご研究とご活躍を大いに期待しています。

## 会員情報

### ◆入会

2015年9月修了者  
《被害者学・修士》大飼 祥雅  
《コミュニティ振興学・修士》安久 正倫  
2016年3月修了者  
《人間科学・博士》渡辺 修宏  
《人間科学・修士》飯島 杏奈,  
小野寺 岬, 角田 晴菜, 小池 正美,  
櫻井 太一, 寺門 彩華, 中村 達大,  
保坂 貴之, 武藤 希, 山崎 稔  
《コミュニティ振興学・修士》  
小沼 涼, 小泉 周司, 仲根 よし子

### 常磐大学大学院同窓会役員

会長 森山 賢一  
副会長 飯森 明子  
監事 森島 彰俊  
幹事 滝沢真智子 橋本 直 佐藤 隆弘  
小笠原尚宏 前小屋千絵 近藤 誠  
大友由梨香

### 会報「思索の杜」編集委員会

委員 飯森 明子 滝沢真智子 橋本 直  
小笠原尚宏 近藤 誠 大友由梨香

## 編集後記

思索の杜 Vol.10をお届けします。「Vol.10」は、大学院同窓会が設立され、会報の初刊より10年が経過したことを意味します。母校を振り返れば、被害者学研究科の設置、水戸⇄東京間の双方向遠隔授業を実現する芝浦サテライトキャンパスの開設など、先駆的な取り組みがなされてきたと思います。2015年をもって、コミュニティ振興学研究科および被害者学研究科は生徒募集が停止され人間科学研究科に集約されますが、先駆的で学際的な母校であり続けることを期待します。

(編集委員長・橋本 直)